

土木とはなにか、そしてその行く末をみつめて

人々が、街が、その完成を心から喜び、祝福する。まだ誰も見たことのない風景のなかで、その光景を眺めていたい。

それこそが、唯一の希望となり、夢となる。

土木のもつ力

関東大震災後の震災復興、そして戦災復興の1950年代、東京オリンピックに湧く60年代。土木は確かに人々と共にあったのではないだろうか。人々が望む復興の象徴や成長の証。それが立ち上がることが人々の喜びとなる、その時代の一端を確かに土木は担っていたのだ。我々は今、不自由なく生活を営み、国民一丸となって目標をたてるべくもない。ただ豊かだ。便利さや快適性、得られたものの影で我々が失ったものは何か、そこで失ったものがいかに大きなものであったか、今こそ議論の厚みを手にする段である。

懐古主義に浸るわけではない。土木の本質的な役割について、真に考えていきたい。

誰がための土木か

土木で設計をやっていると、住民がどのように風景を受け入れてくれるのか不安になることがある。よくわからないのだ。発注者による評定点システム、業界紙による業界内の評価など、内輪な話は嫌でも耳に入ってくる。しかし、知りたいのはそれではない。そこに住む人々の声が聞こえてこないのである。発注者が、住民の声を代弁しているという人もいるだろう。しかし、それは欺瞞だ。建設反対の文字が踊る現場、見られていない、愛されていない土木。一体誰のために設計を行なっているのか、分からなくなる。日本の骨格を担う大規模なインフラストラクチャーの整備であろうと、受け入れるのはそこに住む人々だ。何を感じているのか、それがわかれば、良し悪しに関わらず次へつなげることが出来るだろう。

一方、これは社会システムだけの問題ではない。毎日コンピュータにむかい、資料を作成し、クライアントと打ち合わせをし、資料を修正し……。このフローの中で、誰に対して設計を行うのかという意識が隅に追いやられてしまっているように感じられる。我々の意識にも問題がある。

学生時代、土木設計者の方に実際に会ってインタビューを行い、設計思想を伺うということをしていた時期があった。その内の一人が、「私は設計の玄人に、すごいと言わしめるような設計がしたい」と言ったことに対して、強烈な危機感を抱いたことを思い出す。えも言われぬ飢餓感を覚えた。土木が社会に背を向けている限り、人々もこちらに振り向いてはくれないはずだ。工期に間に合わせる事や業務の遂行などは、政治や経済の都合であって、その風景を受け入れる不特定多数の人にとっては、本質的には関係がない。我々は、目先の作業・成果の品質などに神経質になりすぎ、誰のために、どこを向いて仕事をしているのかを見失ってはいないだろうか。

そしてデザイン之力

現在の日本の社会システムの問題は、どこか特定部位の欠陥によるものではない。平時へ依存したプラットフォームが限界を迎え、機能不全に陥っている。今回の震災はそれを明らかにしたのである。また問題の事象が目に見えず複雑になり、社会全体の方向性も極めて分かりづらくなっている。トップダウンのシステムではもう乗り切ってはいけない。

それを突破し、社会を変えていくことが出来るのは、デザインであると信じたい。

デザインは、人々を考える意識であり行為である。綺麗な絵を描くことだけがデザインではない。人々がなにを求めているのか考える事、住む人の気持ちになる事、そしてそれを設計に昇華させる事。それこそがデザインであり、土木が社会にコミットしていく唯一の方法ではないだろうか。どんなに技術が優れていようと、共感されねばなきに等しい。デザインで技術と人を繋ぐことが、今求められていることであろう。コンサルタントが海外のように強い権力を持てたら、発注のシステムが変わればなどと、社会が変わるのを待っているのでは、何も変わらない。誰が作っても同じ橋を、一体誰が望むであろうか。

亀倉雄策のヒロシマ・アピールズのポスターは、それ一枚で社会に強いメッセージを与えるほどの強い力を持ち、柳宗理のプロダクトはいまでも色褪せること無く、普遍的である。

デザインには、社会を変えていける大きな力がある。それは社会を、人々を考えるからだ。土木は本質的に普遍で、大きく風景を変えるファクターとなる。土木こそデザインの心を持つべきではないだろうか。

土木の先へ

青山士が生涯を通じて貫いた信念として「私はこの世を私が生まれて来たときよりも、より良くして残したい」がある。これは、天文学者ジョン・ハーシェルが残した言葉としてもあまりにも有名な一文である。

今こそ、この信念を胸に、土木の力に改めて目をむける時ではないだろうか。そして、その力を信じ、真摯に設計にあたる必要がある。

私は、土木の行く末を見つめながら、夢に近づいて行きたい。